

Speech

特集講演

第2回堀場雅夫賞授賞にあたって

堀場 雅夫

Masao Horiba

堀場雅夫賞名誉審査委員長
株式会社堀場製作所最高顧問
医学博士



堀場雅夫賞の創設について

本日は受賞者の先生方全員,そしてご来賓あるいは関係者の多くの皆様のご参加のもとに,この第2回堀場雅夫賞授賞セミナーが開かれましたことを,主催者と致しまして大変感激しております。株式会社堀場製作所が誕生いたしました50年,そして私もそろそろ傘寿になるということで,何か社会のお役に立てないかと考えておりました。その頃より私がずっと思っていたことがございまして,それを何とか実現したいと思いました。

私は分析計を研究,開発,そして製造と,ただひたすら,それに60年近くをかけてまいりました。分析計というのは極めて地味な仕事でございます。しかし,この中の技術,あるいは,そのもとになるナレッジというものは,まさに物理・化学・電気・機械そして,理学・生物というあらゆるジャンルのトップの技術を使って行うわけでございます。もちろん,今でこそやかましく言われておりますが,産学連携というもの切っても切れない内容の仕事でございます。そして私どもが仕事を始めた時には,分析というものはまさにサイエンスの基礎中の基礎であるということで,大学にも立派な教室がございました。また担当の教室も本当に立派に活躍されていたわけでございますが,日を追うに従いまして,この分析というものの存在自体が私の目からみるとだんだんと小さくなってまいりました。

分析の必要性は世の中に大変多くあるものの,教育界あるいは学会の中で分析という仕事がだんだんとマイナーになってまいりました。文部省(当時)のいろいろな補助金も,分析プロパーではほとんど付かないという状態になり,しかも日米の間の貿易不均衡から,こういう分析や,あるいは測定器というものを国公立の研究部門が購入する時に,国産品しか絶対に代替えの効かないもの以外は全部輸入品を買いな

いという期間が大変長く続いたわけでありまして、我々分析業界も疲弊し、しかも学会の方も、これは単なるブラックボックスの、研究開発のための手段としか思われなくなったわけでありまして。

しかし、現実の問題としてこのようなことが続いていけば、その基礎中の基礎である物質の解明という非常に重要な部門が、日本から失われていくことを私は大変残念に思いました。

またご承知のように分析計というのは、多くの場合、相対測定であります。ほとんどのものは絶対測定はできません。必ずそこには標準物質というものが必要になってまいります。標準物質というものをどうするのかは、私も随分国とも交渉をしたわけでありまして、国の方は、標準物質ならNBS(National Bureau of Standards)^{*1}のものを使ったらどうかというような、まさに独立国家として甚だ嘆かざるを得ないような考えの方が大変多くございました。

そういうことから、この分野において、地味ではあるけれども若い研究者の方が1人でも出てきて、そして日本のために頑張っていただけないかということをおねがね思っていたわけですが、思い切りまして、また会社の人々も賛同してくれまして、この堀場雅夫賞というものが昨年誕生し、今年、第2回目ということになった次第であります。

*1 : National Bureau of Standards : 米国商務省標準局。現在は NIST と呼ばれている。

人間はすばらしい

私がお社をスタートいたしまして、しばらくして“会社の仕事でもってドクターを取ろうじゃないか”という運動を始めたわけでありまして。そしてその時に、今から思うと大変な失敗ですが、「わしもやるから、お前もやれ。」と社員に号令をかけました。

皆も頑張りました、それぞれの会社のテーマで理学博士・工学博士が誕生したわけでありまして。それは大変うれしいことではあったのですが、私も当時社長でございまして、皆から「社長は『わしもやるからお前もやれ』と言っておいて、我々はドクターを取ったのに“わし”の方は一体どうなってるんですか？」という話をされることになりました。

実際、借金をしに行ったり、あるいは商品のクレームが出て謝りに行ったり、大変忙しく、論文なんて作っている暇はないのだと言いつをしたのですが、やはり社長たるもの二言はないということで、当時、やりかけておりました熱解析を使ったりいろいろな一般物質の分析というものを何とかものにしたいと思いました。ただし、私の後輩が既に理学博士を取ってしまいましたので、社長たるもの、どうも二番煎じはおもしろくないということで、違った学位がほしい。工学もだめであります。薬学といっても関係がないし、農学もだめだ。では、医学で取れないも

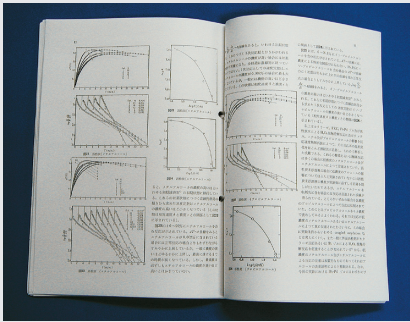


図1 堀場雅夫の学位論文“過酸化水素接触分解反応に及ぼすアルコールの影響”の1ページ(国立国会図書館関西館資料より)

のか？といろいろ考えたあげく、医学部の先生方に相談しましたら、この分析法で、何か生体の中のもの进行分析したらどうかというサジェッションを受けました。

そこで、血液特に血清というものを熱解析で分析をするというテーマを持ちまして、そのテーマで仕事が終わってから論文を書き始めました(図1)。ようやく完成をいたしまして、先生の所へ持って参りましたら、一応内容はよろしいということでありましたが、「君は理学部出身だから、医学のベースをもう少し勉強しろ。」と言われ、また毎夜帰ってから医学の勉強をいたしました。

そして私は、“新しい発見”をいたしました。というのは、私は物理屋でございます。本当にモノを無機的にしか見なかったのが、生命、特に人間というのは、とてつもなくすばらしいんですね。すごいというか、すばらしいというか、本当にその時の自然科学では到底考えられないような機能を持っているわけです。そのことに気づかせてもらいました。こんなすばらしい機能を我々が持っているということを、今までの私はほとんど感じなかったわけですが、その時から私の人生観は変わりました。このすばらしい人間がこの世に生を受けた。しかし悲しいことに、必ず死んでいくわけです。では人間が生きている間、特に人間として一番活躍している20歳から60歳くらいのこの40年間というものは、本当にその人が、生きがいや働きがいを感じなければならぬのではないかと。しかし、そのためにはどうしたらいいのだろうか？人間の幸福とは何だろうか？と考えた時に、私は、“やはり生きがいとか働きがいを感じた時が、人間が一番幸福なのではないか。会社では、だいたい20歳くらいから60歳くらいまで仕事を皆頑張ってもらえる。この一番大切な期間に、本当に生きがい、働きがいを感じるような企業でありたい。”というふう考えたのであります。

“おもしろおかしく”

そして今から約30年前、私が社長から会長になる時に、社是を“おもしろおかしく”といたしました(図2)。もちろん、社内でも決して評判は良くありませんでした。特に、社会から聞こえてくる声は「堀場はどうも、じゃらじゃらしとる。」というものでした。その頃はまだ、“月月火水木金金”の時代でありましたので、「“おもしろおかしく”とは何事だ。」という声も随分聞いたわけですが、ようやく最近になって「ああ、やっぱり仕事は“おもしろおかしく”やらないとだめだ。」というふうに社会的に認知をされ出しました。

しかし、私には大変な自信がありました。私自身の経験から、本当に仕事にやりがいがあり、おもしろくておもしろくて仕方がないというところこそ、仕事の能率もあがるし疲れもないんですね。

命令されて、あるいは義務的に嫌々ながら仕事をした時は、ろくな仕事
 ができませんし、とても疲れるんですよ。仕事がおもしろく能率も上
 がって、しかも疲れない。これほどすばらしいことはないのではないかと
 思います。

やはり企業というものは、“おもしろおかしく” 仕事をするることによっ
 て、すばらしいものができあがり、そして、それをお客様に供給するこ
 とでお客様に喜んでいただく。こういうリレーションが、これからの企
 業にあらねばならないとの確信を持って、現在までこのような考え方
 でやってまいりました。

幸いなことに、先ほど受賞者の皆様とお昼ご飯をいただきまして、いろ
 いろお話を伺いましたが、3名の受賞者の方々は、本当に“おもしろお
 かしく” 研究をなされ、このすばらしい結果を出されたということ
 を聞きまして、私も大変うれしい気持ちで一杯でございます。

最後になりましたが、このような賞というものは、審査によってそのレ
 ベルが決まると言われておりますが、堀場雅夫賞の審査委員の皆様方
 には最高の審査をしていただきまして、大変、賞の格を上げていただき
 ましたことに篤く御礼申し上げます、私の挨拶とさせていただきます。

どうも、本日はありがとうございました。

<第2回堀場雅夫賞授賞式（2005年10月17日、京都大学芝蘭会館）での講演より>



図2 株式会社堀場製作所社是“おもしろおかしく”のレリーフ*

*堀場製作所の協力会社58社（当時）が参加していた堀場洛楽会（堀場製作所の協力会社からなる親睦会）より、洛楽会設立20周年を記念して、堀場製作所創立25周年を祝い寄贈された。“HORIBA”をいろいろな角度から支えるモチーフは、見るほどに力強く、楽しい。またレリーフの下の文字は、堀場会長（現在の堀場最高顧問）の揮毫によるもので、当時、日展審査員の小林尚眠氏が1年半の歳月をかけ制作された。